

大人になってゆく子ども

現代高校生の実態から幼児教育を考える

三 浦 武

一、無気力

私は戦後じきから二十七年間、幼稚園教員養成の学校で児童心理学の講義を担当してきた。(非常勤講師として)その間児童心理学の立場から私なりに幼児教育を考えてきた。それが昭和四十九年、突然都立大学附属高等学校(全日制及び定時制)の校長を命ぜられたのである。校長としての事務には全くのしろうとであったが、青年心理学や臨床心理学の立場で高校生を考え、少しでも彼等がよい生徒に育って行っほしいと努めてきた。

その間いろいろと問題の生徒に接してみて、その問題行動発生の原因を考えると、人間形成の初期(幼児期)の教育の大切さをあらためて痛感させられたのである。

教育実習の学生の研究授業を見るために高校二年の授業を見たことがある。第一時限の授業であったが遅刻が非常に多い。三十分くらいいたたないと生徒がそろわない始末であった。「さあ勉強しよう」と張り切っている姿勢がどうしても見られな。そして休み時間になるとどこかでパパーンというクラッカーをはさず音が聞こえた。これは聞き流してしまえばそれまでだが、私には、生徒たちのやり場のないやるせない気持の発散と聞こえたのである。

小運動会(クラス・マッチ)でも、プログラムの進行がきびきびとは為されない。集合もだらだらとやる。

始業式、終業式などに講堂に生徒を集めて校長として話をする時、ガヤガヤと雑談する生徒がいる。私の話に生徒たちの心を惹きつけられないのは私の力不足をさらけ出したものであるが、教師として三十年勤めてきて、私の大学での授業では学生たちはそんなに雑談はしなかった。

高校生というのが反抗期で「校長」という権威には反抗しなくなる気持があるところに、この学校の「自由の伝統」——旧制高等学校以来の「自由」の伝統が受けつがれていて、こういう状況がもし出されているのであろう。自由ということかっこうがいいが、私にはやる気の不足した無気力のあらわれと思われてならない。自主性のない、責任感を伴わない自由は放縦と利己主義に流れやすいからである。

しかし、もう少し掘り下げてみると、現代の高等学校の置かれている状況にも問題があることがわかる。

昭和二十八年の高等進学率は四七・五%であった。それが今では九〇%を超している。県によっては九七%を超しているところもある。本来、進学は向学心が基礎になければならない。ところが実情は皆が行くから自分も進学しないとこ

うがつかないからという気持の者が多い。

東京都のある工業高校では一年間に百人もの退学者が出たことである。いろいろな論議された。これはもともと工業の課程を学びたい気持のない者が入学してきているからである。普通科の高校に進学するには学力が足りないために工業高校に入学したのである。入学前からすでに「不満」を内蔵している——こういう不満を主体的に解決させる指導が学校側に不足している。

かつて東京学芸大学付属高校や都立西高等学校の研究授業を見たことがある。生徒たちに、教育実習生の話を一言も聞きもらすまいという意気込みがうかがわれた。——学校の格差はたしかにある。そして格差をつけられた側の劣等感と無気力。原因と結果が循環して、今、多くの高校生の心を侵食している。三流、四流とされている高校生のすさんだ気持があるいは暴走族を生み、マージャン耽溺やシンナー遊びとなるのであろう。

二、自発的使用の原理

発達の原理の一つに「自発的使用の原理」がある。子ども

にある能力が出てくるとその能力を使う行動がしたくなる。そういう行動をするのが面白く感ぜられるので、それを繰り返して行なうということである。これは用意性（レディネス）の考え方と相応するものである。

高校生になって、勉強の意欲が足りないのは自発的使用の原理がうまく機能していないからである。小学校入学以来、試験のための詰めこみ教育を積み重ねてきて、いつも本当にやりたいことを思いきりやるという生活をしてこなかった。自分が知りたいと思うことを研究するということをやって来れば、勉強の面白さを味わい、学習意欲がついているはずである。入試に害され、競争原理に巻き込まれ、現代はみんな背伸びした学習生活をしているのではなからうか。最近スタートした「ゆとりある教育」が実効を奏するのを期待してやまない。それにしても、幼児期からの自発的使用の原理に則った教育さえ行なわれておれば、こうした病理原象は発生しないので済んでいるはずである。

三、欲求不満に耐える力

東京少年鑑別所に収容された非行少年の性格を調べた結

果、もつとも著しい特徴は即行性であった。即行性とは欲求不満に耐える力の不足である。がまんができなくて、ほしいものがあるとかっぱらってしまったり、しゃくにさわるとなぐってしまふのである。

都立高校生でもちょっとガンをつけたといったささいなことから二校のグループ間でなぐり合いの事件が起きたことがあった。私が関係した高校でも、学園祭に、ちょっとした暴力事件があった。学園祭の執行委員長のやり方への不満から、夜の暗さに隠れてその委員長をなぐるというケースであった。これらはみな不満を抑える力、自己抑制力の不足から来ている。

さて、この「欲求不満に耐える力」はどうやって養われるものであろうか。

乳児は全く欲求を抑えることを知らない。親のしつけの中で、欲求充足行動の社会化が行なわれる。もつと遊んでいたのが「御飯ですよ」といわれれば、面白い遊びも途中でやめにして食事に移る。その時、彼の心の中で欲求を抑える訓練がなされているのである。寒い朝、起き上がるのがいやで、もつと蒲団の中にいたいと思うが、六時半に起きると決めたからには思い切って起き上る。そこに意志の訓練が為されるの

である。毎日の生活の中のもののような小さな日課の実行の中で養われるこうしたことの積み重ねが実は非常に大事なのである。

戦前はきょうだいの数が多かったので、兄弟喧嘩という形で、自分の欲求ばかりを通すことはできないんだということをお学んだ。(四、五人きょうだいのまんなかの子が一番よい性格になるという調査結果が出ていた)ところが近頃のように一人っ子ないし二人っ子が普通という状態になると、きょうだい喧嘩という場面による抑制力の訓練が不足する。

親も、子どもの数が少ないので、養育の手が行き届き、子どもの欲求を通してやるが多くなる。過保護的な親が多い。幼稚園の年長組くらいになれば家庭で簡単なお手伝いをさせてもよいのだが、母親も家事が省力化されているので、お手伝いをあまり必要としない。むしろ絵やピアノなどのおけいこ事でも行かせられるのが実情である。

子どもが学校に行くようになるともう受験体制という教育界の実情に巻き込まれてしまって、勉強さえやってくれれば、子どもの身の廻りのことすら親がすべて面倒を見ようという親の側の姿勢では、うちのお手伝いなどは問題にならない。お手伝いというのは、子どもにとって、欲求不満に耐え

る力を養うだけではない。その子にとって安定感を養うチャンスでもある。自分も自分のうちにとって、ある役割を果しているのだという認識が所属の欲求の充足となる。また母親の立場の理解にもつながる。それは自己中心性の脱皮へと進む。こういうことがあれば最近問題になっている「家庭内乱暴児」も生れないですむのではなからうか。彼等は自我の未成熟によって乱暴行動に陥っているのである。

四、親子関係

私は登校拒否の高校生何人かとカウンセラーとして取り組んだ。失敗してしまったこともあり、なんとかよい方向に向けられたこともあった。

一人のケースは、父が、いつまでも実家に頼っているような意気地のない男で、たびたび職をかえていた。それに対し母親はしっかりした人であった。こういう「権威のない父親」が登校拒否児のケースには多いことが武蔵野市の教育研究所の調査結果にも示されている。

おひる頃にならないと起きられないという男子(高三)がいた。その父は東大卒で、ある会社の重役をしておられた。

それでもわが子がふて寝をしているのをよう起こせられないのであった。

でもこのくらいならまだ傷は浅い。近頃の家庭内暴力のケースを見ると、自分の欲求が通らないとなると、親をナイフでおどしたり、母の髪をつかんで引きずり廻す子もいる。親がもう親としての機能を果せなくなっているのである。中学生や高校生になってしまうと全く手のつけられない状態になってしまふのであるが、そういうパーソナリティに育て上げってしまったのは、実は乳幼児期からの毎日のしつけの欠陥の積み重ねである。自分で自分の情緒の統制ができない人間に育て上げてしまったのは実はその親である。

現代の日本は「父親なき社会」と言われる。家庭の中でも父親は権威を失ってしまった。私は最近大学生に「自分の父親の感想」を書いてもらった。「自分とは関係のない人だと思っている」とか、「はつきり言うとか好きではない」などと非常に冷たい感想が書かれたのを読んで、今さらながら父子の断絶の実態を知らされた。子どもが心理的離乳をしていく時、父親は子どもにとって「こえて行くもの」である。しかし反抗のプロセスのあとに和合の段階に到達できるための基本的人間関係が形成されているためには、幼児期、少年期の

父子関係の体験が重要である。(学生の中には子どもの頃の体験として、父に対する抜きがたい憎悪感を持っている者もいた)

これに対し、「自分の母親についての感想」を見ると、「うるさい」とか「心配すぎる」などとは言いながら「一番好きな人」と書いている学生が多い。「私の母親に対する感想は、まず彼女が愚かであるということである。しかし物事に対する判断力や情緒的不安定や自己防衛本能の過剰、子どもへの盲目的愛情などを除けば、やはり人生を歩いてきた一人の女性、真剣に生きてきた一人の人間として、頭を下げずにはいられない」と書いた女子学生がいる。

母が子どもに対し絶対優位を保てるのは小学校三年生までである。算数や理科で子どもに聞かれても答えられないことがあると、子どもは親の絶対視を訂正し出す。母親の愚かさやを認識し出す。子どもの論理的思考力が発達すると、現実的で妥協的な母親の思考の矛盾点を子どもは鋭く批判するようになる。しかし、子どもは母の優しさを感じ、自分にとってかけ替えのない人であることを感得し、母への愛情を持ち続ける。むしろ母親の愛情のきょうだい間での奪い合いにいろいろのトラブルが発生する。

ある小学校四年の男子は、母親が兄さんばかり可愛がると思つて、愛情の欲求不満を感じ、母親のハンドバックからお金を盗んでしまったということがある。

しかし母親の愛情過多が「うるさい」「心配しすぎる」という感想に出ていることも事実である。

ある高校一年の男子（Y君）の母親から私は教育相談を受けたことがある。「Yが高校に入学し、バスケット部に入りたいと言うのを反対したら、以後Yは勉強が手につかない。現代国語の試験があるというのに全然勉強しない」ということから始まり、ぼーっとしているから精神分裂病ではないでしようかとか、水をよく飲みパンを沢山食べたがるけれど異常ではないでしょうか、とか、度々電話で相談してきた。気になり出すときさいなことがみな気になってくるらしい。

Y君についていろいろパーソナリティ・テストを試してみたが、本人には大して異常はなかった。むしろ異常なのは母親の方であった。Y君の兄はもう成人していて、勤めの関係で親から離れて暮している。Y君の父は毎日帰宅が遅いし、気学や姓名学に凝っていて、奥さんとは余り話もないという状況で、この母親は専ら次男のY君のことしか頭のない状態であった。

結局その女親はある信仰団体に入ることに、関心が他に移ることによって、Y君への過干渉、心配しすぎがなおると共にY君の心理状態も平常になって行った。心配しすぎと言えば簡単なことであるが、当人はその状況ではそれが心配しすぎとは自覚していないところにむつかしさがある。多くの学生が自分の母親の感想として「心配しすぎる」と書いたのにその母親たちは恐らくそれを自覚していないのではなからうか。子どもが親から心理的離乳をすることは母子分離として大切なことであるが、それとともに母親の子どもからの心理的離乳もまた必要である。

以上いろいろと思いつくことを書いてきましたが、高校生のパersonalityはよきにつけ、悪しきにつけ、乳幼児期以来の人間形成の成果である。幼児教育に携る方々は、今日のことだけではない幼児が九年後には高校生となり、十二年後には大学生となった時の姿をはるか彼方に見すえつつ、それを単にあこがれの未来像として思い描くだけでなく、現在の毎日のしつけ教育との連続の上で考えて、毎日の保育をつみ重ねていただきたいと思えます。

（東京都立大学）